

## 第九章 大阪・和歌山地方の塔

### 第66番 勝鬘院多宝塔—和宗—

大阪市天王寺区夕陽ヶ丘町

勝鬘院は、地下鉄夕陽ヶ丘駅で下車し、2分も歩くと山門につきます。

歴史は、聖徳太子が建立された四天王寺施薬院であって、太子がこの地で勝鬘経を講ぜられたので、勝鬘院といいます。ご本尊は、愛染明王で、通称「愛染さん」と呼ばれています。

現在の本堂および多宝塔は、豊臣秀吉が、慶長年間に再建したものです。多宝塔は、一辺6.43m・総高さ22.44mの本瓦葺きのどっしりとした塔で、慶長二年（1597）建立です。木割りが太く、下重は火灯窓のほかは和様で、上重はほぼ禅宗様の手法で造られています。この塔は本堂の後方軸線上に建ち、大威徳寺と同じの珍しい配置であります。現存する多宝塔では、浄土寺と並ぶ最大級のものです。



現存する多宝塔では、浄土寺と並ぶ最大級のものです。

## 第 67 番 天野山金剛寺多宝塔—真言宗御室派—

大阪府河内長野市天野町

南河内にある金剛寺は、南北朝時代に、南朝の後村上天皇の御座所と北朝上皇の御座所が、同時期、同一敷地内に存在していたことと、我が国最古の多宝塔の形式を有する建物があることを知り、勇躍出向き、拝観しました。

南海河内長野駅で降りて、バスに乗り天野山で下車すると、バス停のすぐ傍らに金剛寺の山門があります。

歴史は、天平年間に聖武天皇の勅命により、僧行基が開創し、後に弘法大師が、霊地としてこの地を選んだと伝えられています。その後寺は衰退しましたが、八条女院の帰依を受け再興し、女人高野と呼ばれ栄えるようになったといわれています。

多宝塔は、金堂と向かい合って建っています。建立のはっきりした年代は、判っていませんが、平安時代後期と推定され、全国で最古の多宝塔ということになりますが、桃山時代に大修理を受けています。全体の比例は古風で、下重が横に広く丈が低く、桃山時代の材に替わっています。上重の組物は、変形の六手先としたり、相輪上方の宝珠に火炎をつけない等は、他に例をみません。一辺 5.77m・総高さ 17.1m で、柿葺きの堂々として落ちつきのある塔であります。



## 第 68 番 法道寺多宝塔—高野山真言宗—

大阪府堺市鉢が峰町

法道寺に、鎌倉時代の建築物である食堂と室町時代の建築物である多宝塔があることを知り、出向いて行きました。泉北高速鉄道・泉が丘駅からバスに乗り、鉢が峰で下車するとすぐに山門があります。

歴史は、勅願寺で古来閑谷院長福寺といい、大鳥神社の奥の院といわれてきましたが、明治五年法道寺と改称しました。最盛時には多くの塔頭があったと伝えられていますが、豊臣秀吉の根来攻めの折に、兵火にかかり大部分を焼失しました。

焼け残った建物のうち多宝塔は、正平二十三年（1368）の建立で、室町時代を代表する建築物であります。かなり大型の塔で、上重の軒を扇垂木としています。上重の屋根を支えている肘木に鯨を刻んだり、縁の腰組に蛙股を入れたり、下重の木鼻や拳鼻の意匠を一つずつ変えるなどの手法が目を引きます。折衷様式で、一辺 4.75m・総高さ 18.63m の本瓦葺きの安定感のある均整の取れた塔です。



## 第 69 番 牛滝山大威徳寺多宝塔—天台宗—

大阪府岸和田市大沢町

もみじの名勝牛滝山として知られる山岳寺院・大威徳寺に美しい朱塗りの多宝塔があると知り、思い切って岸和田の山中に分け入りました。

大威徳寺は、南海岸和田駅からバスに 50 分乗り、終点牛滝山で下車すると、参道があり 2 分ほど歩くと着きます。

歴史は、役行者の開創と伝えられ、古来葛城修験道霊場として崇敬されてきました。大乘坊恵亮の修行中、本尊となっている大威徳明王が、滝の中から青い色の牛のような石の上に乗って現れたことから、山号の牛滝山、別称の牛滝寺が生じたと伝承されています。

多宝塔は、永正年間（1504～21）の建立で、一辺 3.1m・総高さ約 13m の本瓦葺き、朱塗りの小型ですが、美しい塔です。全体の形は、細高い感じですが、木鼻などの意匠が凝っています。また、塔が本堂の後ろ中心線上に建つ配置は、あまり例がありません。



## 第 70 番 大悲山慈眼院多宝塔—真言宗御室派真言宗御室派—

大阪府泉佐野市日根野

泉南に日本で最も小さな国宝の多宝塔があることを知り、早速訪れました。阪和線で関西新空港への分岐点の日根野駅でバスに乗り換え、10分ほどの東上停留所で降りるとすぐ南側に、慈眼院はあり、大井堰御坊とも証されています。日根神社の旧神宮寺で、もと井堰山願成就寺福寿院と号しました。

寺伝によれば、天武天皇の勅願所として創建され、嵯峨天皇の時代に空海が一時住んで、一山を整備したと伝えられています。南北朝時代・天正年間に兵火にかかり羅災したが、豊臣秀頼の命により再建され、寛文五年（1665）仁和寺門跡より慈眼院の院号が賜与されました。

現在残っているのは、本坊と金堂と多宝塔のみです。鎌倉時代建造の多宝塔は、塔身の細さに対して下重の高さが高いのが特徴です。下重の組物は二手先、中備は墓股で、上重は四手先、二軒繁垂木で屋根は檜皮葺きです。一辺 2.69m・総高さ 10.6mの塔です。



## 第 71 番 一乗山根来寺大塔—新義真言宗—

和歌山県那賀郡岩出町根来

強力な僧兵を有し、真言宗三大学山の一つとして、現存する最大・最古の木造多宝塔がある根来寺を巡礼しました。根来寺は、紀伊駅からバスに乗り、根来で下車します。そこから徒歩で 10 分ほど行くと嘉永三年に再建された、巨大な大門に着きます。さらに、10 分歩くと大伝法堂に着きます。

歴史は、金剛峰寺座主であった覚鑿上人が、高野山と対立し保延六年（1140）に根来にあった豊福寺に居を移したことに始まります。その後も反目が続き、鎌倉時代の 1288 年、大伝法院・密厳院は高野山から根来に移り、円明寺・豊福寺のほか子院多数からなる根来寺が成立しました。

以後、新義真言宗の根本道場として、また総本山として、室町時代末期の最盛期には、院坊 700・僧兵 1 万余誇った大寺でありました。天正 13 年豊臣秀吉の焼き討ちにあい、大師堂と大塔などの一角を残し焼失しました。江戸時代に、徳川家の援助を受け、今日の姿に復興しました。

高野山の旧大塔形式を伝える根本大塔は、明応五年（1496）の建立で、一辺 14.92m・総高さ 35.9m の壮大なもので、宝塔の姿を持ち、風格があり、堂々たるものであります。下重柱間は五間で、内部に入ると十二本の柱が円形に並び、その中の四天柱が建っています。これが多宝塔の原型である一重裳階は宝塔に近い形式を示すものです。亀腹が大きいのも古式で、宝塔の塔身頂部の名残です。上重軒の出が深く、初めから軒支柱が建てられました。



## 第 72 番 金剛三昧院多宝塔—高野山真言宗—

和歌山県伊都郡高野町

日本三名塔の一つであり、石山寺の次に古い多宝塔が、高野山の金剛三昧院にあると知り、早速高野山に出向いていきました。金剛三昧院へは、まず難波から南海電車に乗り、極楽橋駅で降りて、ケーブルカーに乗り換え高野山駅へ向かいます。そこからバスに乗り、千手院橋で下車し、歩くこと 10 分で到着します。

歴史は、北条政子が 1211 年に、源頼朝の菩提のため建立し、初めは禅定院と号しましたが、1219 年に実朝菩提のため改建して金剛三昧院と改称しました。以降將軍家の菩提寺としての役割を担ってきました。堂宇の完成は、1223 年で、政子が檀主となり、建立奉行は、秋田城主安達影盛が勤めました。

多宝塔は、現存するものの中で、二番目の古さをもち 1223 年の建立で、運慶作と伝えられる五智如来像が祀られています。下重は柱間が広くて軒が低く、上重は軸部が細くて軒が深く、軽快優美な姿をみせています。下重は大面取りの方柱に平三斗を組み、上重は円柱、四手先を用いています。一辺 5.5m・総高さ 15.6m で、均整の取れた秀麗な美しい塔です。



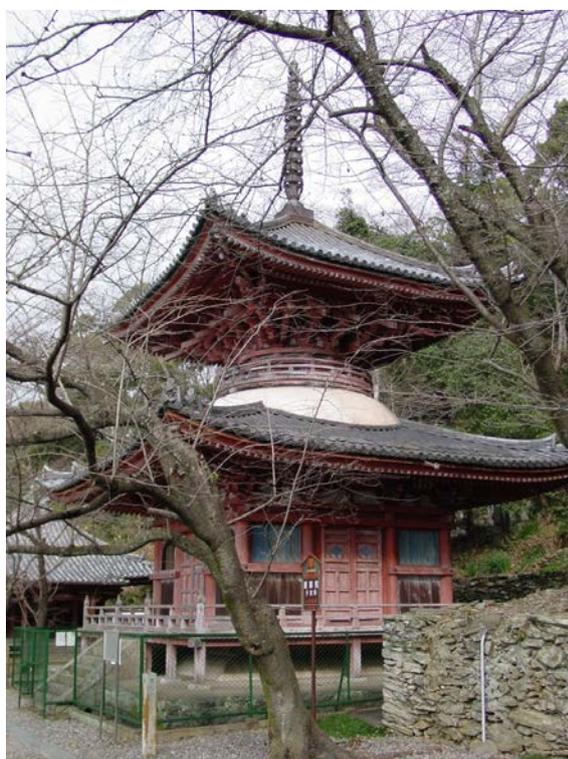
## 第73番 紀三井山護国院金剛宝寺多宝塔—救世観音宗—

和歌山県和歌山市紀三井寺

山内に清浄水・楊柳水・吉祥水の名水井戸があることと室町様式を示す多宝塔に惹かれて、護国院金剛宝寺へ出向いて行きました。

護国院へは、紀三井寺駅で下車し、線路に沿って10分ほど歩くと、左側に楼門が見えます。楼門をくぐり長い石段を登ると、名草山の中腹にある境内にたどりつきます。西国観音霊場の第二番札所として有名な寺です。

寺伝によれば、唐の僧・為光上人が渡来し、当地に至り、等身大の十一面観音像を刻み、一字を開いてこれを安置したことに始まるとのことです。後白河法皇のとき、勅願寺となりましたが、天正年間の豊臣秀吉



の雑賀攻めでほとんど焼失しました。本堂は、紀州徳川家の発願で、江戸時代中期に再建されました。本堂の右手を少し上がると、天正十六年（1588）に建立された多宝塔が、建っています。上重塔身の直径は下重柱間の丁度半分、相輪長さが、下重柱間と同じという比例をもっています。本瓦葺きで、一辺4.32m・総高さ15.43mの落ち着いた雰囲気のある塔です。

### 宮大工のざれごと⑨「眠り猫」の裏面彫刻は？

日光東照宮の東回廊、奥宮入口に左甚五郎作と伝えられる「眠り猫」の彫刻があります。小さな彫刻ですが、寝ている猫の裏では二羽の雀が遊び、天下統一後の安寧な時代の象徴といわれています。和歌山県にも、西の日光と呼ばれる紀州東照宮があり、日光とそっくりな眠り猫の彫り物が本殿横手の小さな門にひっそりとあります。

## 第 74 番 慶徳山長保寺多宝塔—天台宗—

和歌山県海草郡下津町

紀州徳川家の廟所であり、国宝の落ち着いた多宝塔があることで有名な長保寺に、出向いていきました。長保寺は、下津駅からバスに乗り、1km ばかり行った浜中バス停で下車し、山手の方に 15 分ほど歩くと、1388 年建立の大門が建っているところに着きます。

歴史は、一条天皇の勅願で長保二年に造営が始まり、開基は書写山円教寺を開いた性空であると伝えられています。余談になりますが、一条天皇には、二人の皇后があり、それぞれお付の女官が、清少納言と紫式部でありました。長保時代は、平安貴族社会が頂点に達した時代です。鎌倉時代末期に伽藍も整えられましたが、戦国時代には、衰えてしまいました。

寛文六年（1666）に、初代紀州徳川藩主・頼宣が菩提寺と定め、変転していた宗派を天台宗に復し、5 百石を与え、以来紀州徳川家廟所として繁栄していきました。

本堂の右手にある多宝塔は、1357 年建立で、上重塔身は細いが、下重は軒が高く柱が円柱で、亀腹もかなり小さい。一辺 5.92m・総高さ 13.36m、本瓦葺きで、一重と二重の釣り合いが良く、力強さを兼ね備えた美しい形の塔であります。



## 宮大工の知識—区軒まわり

**軒** 丸桁に垂木や厚板を使って持ち出し、屋根を受ける部分で、軸部を風雨や夏期の陽射しから守る役目を果たす。

**垂木** ・平行垂木 繁垂木/疎垂木/吹寄せ垂木  
**配置** ・扇垂木  
 ・隅扇垂木 隅だけが放射状でほかは平行

